

1 雷別地区自然再生事業について(つづき)

今年度の実施内容

1 地表処理

●笹地 11 において、人力（電動刈払機）による地表処理を実施（5月～9月、本年度植栽箇所）



人力による地表処理

●笹地 9 において、大型機械による地表処理を実施（7月、1.23ha）



大型機械による地表処理

2 植栽等

●笹地 11 において、雷別ドングリ倶楽部によりミズナラ、ハルニレ、ヤチダモ計 150 本を植栽ツリーシェルターにより被覆（5月）

●笹地 11 において、地元住民と協働によりミズナラ、ハルニレ、ヤチダモ計 150 本を植栽ツリーシェルターにより被覆（6月）

●笹地 11 において、企業の社会貢献活動と釧路高専との連携によりによりミズナラ、ハルニレ、ヤチダモ計 200 本を植栽ツリーシェルターにより被覆（9月）



雷別ドングリ倶楽部による植栽作業の様子

3 保護管（ツリーシェルター）で被覆した植栽木の生存率及び成長の調査

（1）被覆した植栽木の生存率（2018 年調査）

2009 年植栽：生存率 96%

2016 年、2017 年植栽：生存率 98%

<生存率の高い理由>

ツリーシェルターの設置により
野生生物による食害、強風・寒風害から保護



植樹時 70cm、2 年 5 月後 200cm の植栽木

（2）成長

●年平均 43cm の成長を示すものもあった。

平成 31 年度の事業予定

1 人口植栽及び食害対策

●笹地 9、笹地 10～笹地 13 において、広葉樹の植栽とツリーシェルターによる被覆

●笹地 7、笹地 8 において、人工植栽区域の地表処理（その後、植栽等を予定）

このようなことが話し合われました。（詳しくはHPをご覧ください）

委員長 委員 事務局

●樹高がツリーシェルターを超えた後はどのようにするのか。

●ツリーシェルターは樹木が大きくなったら自然に割れるため、その後回収する。

●植栽する稚樹木は苗床をどこで育てたものか、あるいはどこから持ってきたものなのか。また、エゾシカやユキウサギ、ネズミなどの食害比率はどの程度か。

●苗木は雷別地区周辺の種子を用い、業者が生産してある程度大きくなったものを購入している。野生生物ごとの食害割合は分からない。

2 達古武地域自然再生事業について

今年度の実施内容

1 再生工事

植栽 3.9ha 約 1.4 万本

ササ刈り 春季～夏季 3.21ha

育苗 播種・定植～管理～仮植、採種

2 調査等

稚樹等の生息状況調査
・再生過程の追跡調査（植栽木）
・エゾシカによる影響調査（稚樹・林床植物）

生態系モニタリング調査（昆虫）

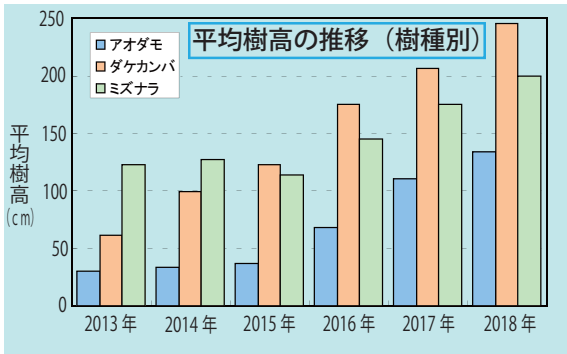
その他の取組
種苗生産等の実施
達古武川上流部の調査
環境学習プログラムの実践（GW 連携事業含む）

今年度の調査結果速報

1 稚樹等生息状況調査

（1）再生過程追跡調査（植栽木）

目 的	対象手法	調査結果	今後の方針
成長過程の把握、植栽手法の検証	植栽した苗木（防鹿柵内）の生存率・成長量を調査	・生存率：ほぼ下げ止まり ・平均樹高：ダケカンバ約2.5m[最大4m]、ミズナラ2m、アオダモ1.3mを超える(植栽後5年) ・植栽サイズや場所により、成長に差が見られる	・保育を要する年数を樹種ごとに推定 ・植栽サイズや場所による成長速度の違いも考慮



調査植栽木	
樹 種	調査本数
アオダモ	47
ダケカンバ	66
ミズナラ	56
ハルニレ	1
ヤチダモ	2
計	172



ダケカンバの成長状況

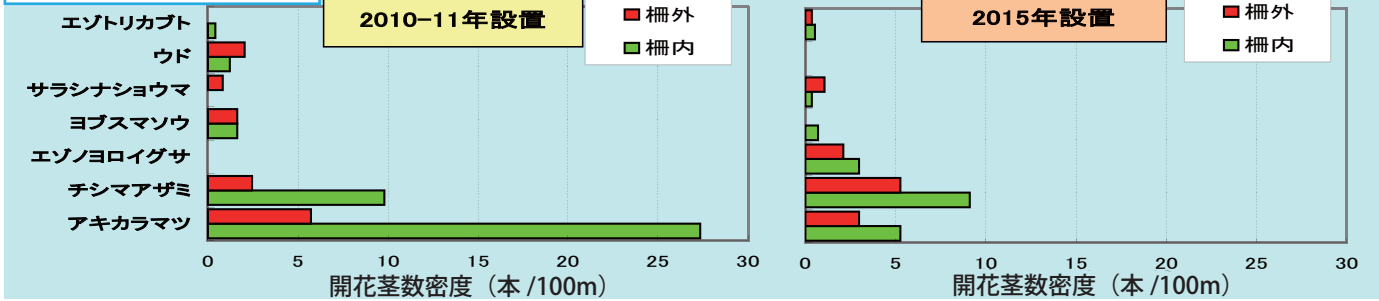
（2）エゾシカによる影響調査（稚樹）

目 的	調査手法	調査結果	今後の方針
シカ捕獲の効果検証、柵外での被食増加の検証	6エリアで柵外に生育する天然更新している稚樹を調査	・冬季食痕率は増加傾向。エゾシカ密度増加？ ・夏季の食痕は減少傾向。草本類の回復によりエサ資源が増加？ ・被食率は増加したが樹高成長はプラスを維持	・樹高成長は続いているが、被食影響が増えており、今年度は達古武地区での捕獲を休止することから影響を注視

（3）エゾシカによる影響調査（林床植物）

目 的	調査手法	調査結果	今後の方針
シカ捕獲の効果検証、柵外での被食増加の検証	19区間で柵外に生育する林床植物23種を調査。一部区間で柵内と比較。開花期(7・8月)に実施	・各種の食痕率は0～44%で、嗜好性は異なり、種によっては高い食痕率 ・同種でも、区間ごとの食痕率は大きく異なり、場所も食痕に影響している。 ・開花茎数の密度が高い種では柵内での密度が高い。（チシマアザミ・アキカラマツ） ・柵の設置年数が長いほうが、柵内の密度も高い。	今年度データを初期値として、今後の開花茎数や食痕率の変化から影響を把握する

柵内外の開花茎数の比較



3 生態系モニタリング調査（昆虫）

目 的	調査手法	調査結果	今後の方針
森林性の種の状況を把握	歩行性昆虫調査 6月と8月にトラップ調査 森林性の種を抽出	・事業による変化は未だ出ていない。 ⇒ 広葉樹林化はまだ未達成 ・指標値を算出する昆虫は、開始当初に比べると減少傾向	・再生に伴う変化を長期的に見て行く ・自然林の変化も留意